

取材日：2014年 8月22日



リウマチ



愛媛県

愛媛大学病院を含めた8施設が、 県内リウマチ医療の質向上に立ち上がる。

Point of View

- ① 「専門医の派遣」と「専門医との連携」を2本柱に
- ② 連携における患者の紹介、治験の参加、学会発表、学術講演会の開催などを事業とする
- ③ 「いかに病院の医師が動くか」をベースにした地域医療連携

愛媛大学大学院血液・免疫・感染症内科学
(第一内科) 特任教授

長谷川 均 先生

愛媛大学大学院血液・免疫・感染症内科学
(第一内科) 助教

末盛 浩一郎 先生

愛媛大学大学院血液・免疫・感染症内科学
(第一内科) 医員

石崎 淳 先生

愛媛医療生活協同組合
新居浜協立病院整形外科部長

曾根 康夫 先生

社会医療法人社団更生会
村上記念病院内科医長

岩政 喜久恵 先生

独立行政法人地域医療機能推進機構
(JCHO) 宇和島病院院長

渡部 昌平 先生

2本の柱は、専門医派遣と 専門医のいる施設との連携

愛媛県におけるリウマチ専門医療機関のほとんどが松山市内とその周辺に集中しており、他地域と比較して明らかな医療格差がある。その状況を改善するために、愛媛大学医学部附属病院（以下、愛媛大学病院）膠原病・リウマチ・アレルギー内科（第一内科）が県内の医療機関と連携し、リウマチ・膠原病の医療の質の底上げをめざしたプロジェクトが、連携名をEURAN（ユーラン：Ehime University-associated Rheumatoid Arthritis Network）と称する取り組みだ。

構想を提唱し、立ち上げた長谷川

先生が語る。

「愛媛大学病院第一内科が県内のいくつかの医療機関にリウマチ専門医を派遣している取り組みは、そういった問題解決の一助になってきたと思いますが、人的資源に限りがあり、地域の病院の要望には十分応えられていません。

そこで専門医派遣に加え、信頼で

きる専門医のいる医療機関と連携し状況改善を加速させようと考え、創設したのがEURANです。専門医派遣と専門医のいる医療機関との連携を2本の柱として、県内のリウマチ医療を全体的に底上げしていく構想です。

事業を（1）患者の相互の紹介、（2）治験の参加、（3）学会発表、



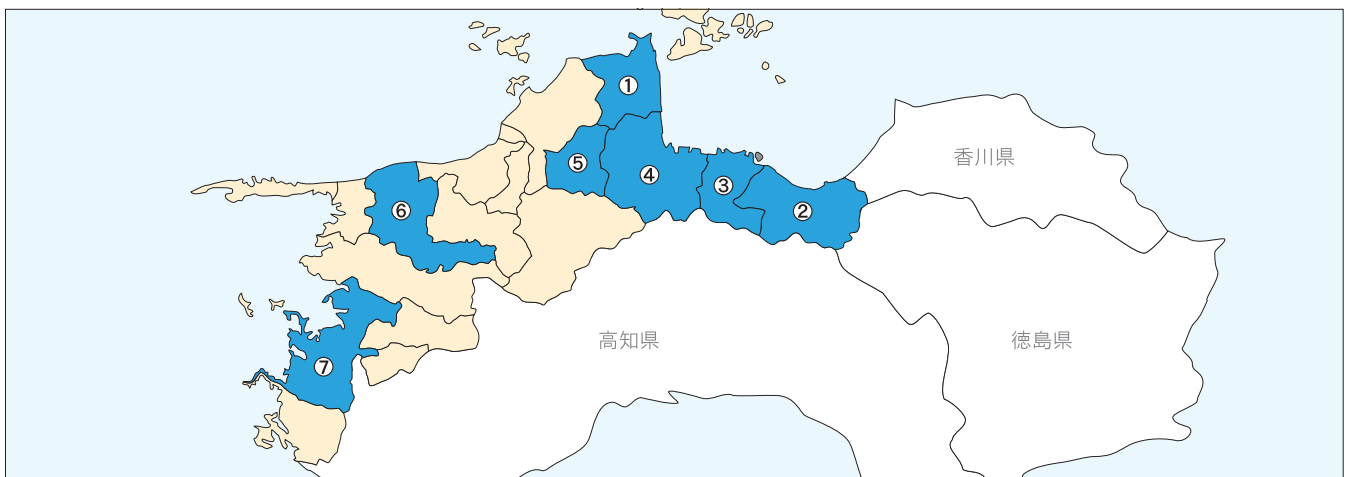
左から長谷川先生、末盛先生、石崎先生、曾根先生、岩政先生、渡部先生

【資料】

EURANに参加する医療施設

所在地	医療施設名
①今治市	医療法人順天会放射線第一病院(文中、放射線第一病院)*
	医療法人平成会山内病院(文中、山内病院)*
②四国中央市	社会医療法人石川記念会HITO病院(文中、HITO病院)*
③新居浜市	愛媛医療生活協同組合新居浜協立病院
④西条市	社会医療法人社団更生会村上記念病院(文中、村上記念病院)*
⑤東温市	愛媛大学医学部附属病院(文中、愛媛大学病院)
⑥大洲市	医療法人恕風会大洲記念病院(文中、大洲記念病院)*
⑦宇和島市	独立行政法人地域医療機能推進機構(JCHO)宇和島病院(文中、宇和島病院)

*: 愛媛大学病院が専門医を派遣している施設



(4) 学術講演会の開催など、と定め、2013年2月に活動を開始しました」(長谷川先生)

EURANの参加施設は、【資料】に記載されている計8施設。放射線第

一病院、山内病院、HITO病院、大洲記念病院は、愛媛大学病院第一内科が定期的に専門医を派遣している施設だ。

2014年8月現在、リウマチ800例、

膠原病450例がEURANのネットワークに乗っており、うち生物学的製剤適用例は150例に及ぶ。EURANによって生物学的製剤を導入した患者に関しては、年に一度、必ず愛媛大学病院での評価を受けることとなっている。

地域でのリウマチ医療の重責に手厚いバックアップ

EURAN誕生の意義について、各先生が語る。

「現代の患者さんは情報を多く持って



おり、私が診療する新居浜市でも、情報収集力と移動手段のある患者さんには松山市内のリウマチ専門医を受診している方も多いです。当院を受診している患者さんたちの多くは地元での受診を選んだ方と間違いないようです。

そう考えると、私たちの地域に対するリウマチの標準医療を提供する使命はより重くなるわけですが、難治症例や重度合併症の事例を強力にバックアップしてくれる愛媛大学病院との連携は心強いものです。

私も含め、県内に多くいるリウマチ医療に取り組む整形外科医にとって、内科的な知識や技術は専門内科医のサポートが何より大事です。その点をシステムにしたEURANの誕生の意義は、とても大きいと思います」(曾根先生)

「私が医療に取り組む東予地域や南予地域は、特にリウマチ専門医が少なく、私たち専門医の使命は大きいと認識していますが、これまで孤軍奮闘の自覚が強かったのも事実です。必要ときに愛媛大学病院の助力が

得られるEURANの誕生は、本当にありがたいものでした」(岩政先生)
「私は、2013年1月に宇和島病院の院長に着任するにあたり、専門としてしているリウマチ医療をいかに展開すべきかと悩んでいました。

そんな折り、着任翌月にEURANが生まれてくれたのは福音と言えるものでした。発足当初から積極的に活用させていただき、患者さんを多く紹介していますし、愛媛大学病院からの逆紹介の患者さんも多く受け入れさせていただいています」(渡部先生)

愛媛大学病院が提供する トータルマネジメント

石崎先生は、派遣先であるHITO病院に、2013年、リウマチ外来を開設した。

「当初は一般内科のメンバーとして週1回勤務していたのですが、リウマチ・膠原病の患者さんの増加を受けて専門外来とすることを病院側に了承していただきました。

リウマチ専門医が常勤していない同院では、私の不在日に生物学的製剤に関する感染症などの合併症が出現した際の対応が問題となります。その問題は、EURANで解決できました。

一般内科的な対応は、常勤医に申し送りをする体制を築くとともに、生物学的製剤の初回投与を愛媛大学病院で行うことで、緊急時の場合に大学病院との連携が非常に容易となりました」(石崎先生)

愛媛大学病院の提供するバックアップの特徴について、末盛先生が解説する。

「当大学の第一内科は血液・免疫・感染症内科学教室ですので、血液や感染症も含めたトータルマネジメントを提供できます。

たとえば、リウマチの治療中にリンパ増殖性疾患や重症感染症などの合併症が発症した場合などは、当院に入院し、各分野の専門家から最適なアドバイスを得ながら治療方針を立てられます」(末盛先生)

一方通行ではない関係で 地域にも大学にも恩恵が

EURANは、参加する医療施設の間に患者の相互紹介の関係を育みつつある。

「医療機関の連携に詳しくない患者さんは、極論すると、医師とは全国的全医師同士が完全に意思疎通できているかのような認識をお持ちです。医師や医療機関が連携することの難しさなどはご存じないですし、別の機会に受診した2人の医師が自分の医療情報を共有しているはずだと思います。

そういった医療は、理想的なかたちのひとつに間違いはありません。



お話をうかがった皆さん

EURANを通じて、多くのリウマチ医の先生方と『顔の見える関係』が広がり、結果的に患者さんが考えている理想を実現できる感触に対し、ちょっとした喜びを感じています」(岩政先生)

「リウマチ医療をより良く発展させるという観点で見れば、地域にいかに関わり、リウマチ標準医療を届けるかは大切ですが、先進医療を展開している病院への負荷をいかに低減させていくかも、見逃してはいけないポイントです。

地域で活動する私たちが愛媛大学病院などの先生方と『顔の見える関係』となり、症状の安定した患者さんをより多く受け入れることの貢献度はかなり大きいと実感しています」(曾根先生)

「このネットワークは、一方通行ではなく、愛媛大学病院からも症状の安定した患者さんを連携先に逆紹介するなどの相互依存の関係となっています。

また、患者さんの病態が悪化した際に、まずは近医である連携先の医療機関を受診できることは、患者さんにとっても我々にとっても大きなメリットがあり、こういった機能をさらに発展させることで愛媛県全域に貢献できると考えています」(末盛先生)

患者紹介に関しては、現状、参加施設間での交流がメインになっているが、将来的には中核病院からさらに地域のご開業の先生方との間にまで伸びた紹介のネットワークとする構想があたためられている。

「一例として、村上記念病院では、EURAN立ち上げ以前から地域の医療機関との間に患者さんの相互紹介や医療情報の共有があります。

8つのEURAN参加施設もそれぞれに独自の地域医療連携があると思

われます。将来的には、8つの参加施設が中核病院の役割を担いながら地域との医療連携を、EURANに取り込んでいくことになるでしょう」(岩政先生)

いかに病院医師が動くかをベースにした独特の構想

長谷川先生は、「リウマチ専門医は地域に積極的に出向いて診察し、患者啓発すべきだ」との信念を持っている。信念にしたがい、放射線第一病院や大洲記念病院では自ら外来を担当している。

「『あの病院にはリウマチの専門医がいる』との情報が口コミで広がり、これまで体の痛みを我慢していた高齢者が受診してくれる現象には心から喜びを感じます。

あるときなどは、初診の患者さんから『老人会の寄り合いで、友人に受診をすすめられた』と聞き、患者啓発活動のヒントを得た思いがしました」(長谷川先生)

通常、病院を中心にした地域医療連携は、「いかに病院の医師が動かすにすむか」との発想をベースとしているが、長谷川先生の場合は「いかに病院の医師が動くか」をベースに足りない点を埋めるかたちで連携を発想しているのが特色と言えるだろう。このユニークな構想の今後の発展から目が離せない。

現在は患者紹介を中心に進められているEURANの活動だが、近い将来、治験や学会発表に注力する局面が訪れると期待されている。学術講演会についてはすでに、年2回のペースで実施されている。

直近の最大の課題は、広報活動とすること。患者にも医療機関にも、広くEURANの存在を知ってもらい、より良く活用してもらうためだ。渡

部先生が広報の方向性について語ってくれた。

「患者さんは、患者友の会に参加し熱心に勉強するタイプと、そうでないタイプに大別できると思います。私は、EURANの存在を広めるにあたって、その2つのグループを意識して広報活動すべきと思っています。

実際に患者友の会で講演してみると、想像どおり反応は良好で、『このグループにはすぐに認知していただけるな』と実感します。

しかし、もう一方のグループは、情報に触れる機会も少なく、熱心さも低いです。そういった方々への広報においては、何より地道さが必須です。日常の診療活動の中で、機会を見つけて説明をする取り組みをコツコツとつづけているところです」(渡部先生)

愛媛大学医学部附属病院 第一内科

〒791-0295
愛媛県東温市志津川
TEL : 089-960-5296

愛媛医療生活協同組合 新居浜協立病院

〒792-0017
愛媛県新居浜市若水町1-7-45
TEL : 0897-37-2000

社会医療法人社団更生会 村上記念病院

〒793-0030
愛媛県西条市大町739
TEL : 0897-56-2300

独立行政法人地域医療機能推進機構 (JCHO)宇和島病院

〒798-0053
愛媛県宇和島市賀古町2-1-37
TEL : 0895-22-5616